

の共同体は、過去、及び現在においても、フランスにおいて重要な位置を占め続けています。フランス・プロテスタンティズムは、フランス社会における少数派ではありますが、決して周縁的(マージナル)な存在だったわけではなく、また現在においても、そうではないのです。

これらの基本的事項に基づいて、フランスにおけるプロテスタンティズムの現状をご紹介します。それを、二つの部分に分けたいと思います。まず、過去からの継承に由来するところの、現在の特徴と問題点を指摘します。次に、現代社会の発展により、その中でプロテスタンティズムが直面している挑戦に言及し、フランスにおいてプロテスタンティズムの前に開けている未来への展望を、概観します。

プロテスタンティズムについての最も偉大な、現代の歴史家であるレオナルドは、二つの要素によって、フランス・プロテスタントのアイデンティティを定義しようと試みました。彼によれば、フランスのプロテスタントは、一方では、「過去に生きる人間」です。すなわち、自ら誇りとする先祖の子孫であり、家族的伝統に結びつき、特別な歴史的状況によって形作られた信仰と敬虔の継承者です。しかし、他方では、神の臨在と命令を待ち望み、教会の覚醒を待ち望み、最終的には神の国の到来を待ち望む、「待望する人間」でもあります。そのように、現在プロテスタンティズムが直面している肯定的、及び否定的な問題を、この過去と未来という両極に従って、指摘していきましょう。

## 1. 遺産：長い歴史からの継承による、現在の特徴と問題点

この第一部では、十六世紀から二十世紀までの長期の歴史的状況が、現在のフランス・プロテスタンティズムへ及ぼした結果を、検討しましょう。私には、特に、次の三点が重要と思われる。少数派という地位。地理的・社会的拡散。最後に、ある種の神学的・霊的多様化ですが、これは、それ自体過去に古い起源を持つ、個人主義と結びついています。

### A. 少数派としての地位

今日、フランスにおいてカトリシズムは後退しているにもかかわらず(これは第二、第三の点で、再び触れます)、プロテスタンティズムは、十六世紀以来、常にそうであったように、少数派に留まっています。私はすでに、宗教改革に起源を持つ諸教会に結びついている人口数を、挙げました。90万人、すなわち全人口の約1.5%です。十八世紀の末に、プロテスタンティズムに好意的である宗教的寛容が、少しずつ定着したのですが、その時期に安定して以来、現在に至るまで、この数字は、ほとんど変わっていません。それは、特にカトリックと比較した場合、社会の世俗化にも関わらず、プロテスタントは大幅な後退を示していない、ということの意味します。しかし同時に、この時期以来、ほとんど教勢を伸ばしていない、ということもできます。ただし、一世紀以上に亘るこの相対的な安定は、純粹に数字上の事実です。少数派であるという事実は、時代と共にその意味を変えたのであり、その現在の意味を理解するには、ここでいくつかの歴史的事実を想起するのがよいでしょう。

プロテスタンティズムは、十六世紀の宗教戦争(それは、内戦でもあったのですが)の前夜、1560年頃に、拡大の頂点に達しました。ある歴史家たちは、人口の8%から10%に至ったと見積もっています。しかしこの数字は、この後、宗教戦争や、一七世紀から十八世紀にかけての組織的な迫害により、大幅に後退します。すでに述べたように、迫害が終結する十八世紀の末には、安定します。これらの連続的な挑戦に当面し、フランス・プロテスタントは、次々といくつかの戦略を採用しました。

まず第一に、十六世紀から十八世紀までは、「生き残る」ための戦略です。彼らは、特に教理的・教会組織的な面において、強く結束しました。彼らは「ラ・ロシェル信仰告白(La Confession de La Rochelle)」という、同じ正統的信仰告白を共有し、(それが可能である期間のみのことですが、)長老会—シノッド(synode)の構造を持つ「フランス改革派教会(les Eglises Réformées de France)」の一員だったのです。(アルザス・ローヌと、そのルター派教会は、一七世紀まで